

## 新刊紹介

九四(一九四)

第三章「商業革命の離陸」では、ユダヤ人とイタリア人による刺激が、経済の離陸の重要な要因として提示されている。特にイタリア諸都市について、自治、社会構造、後背地との関係などの独自性や、貨幣や信用、契約、輸送などの諸発展の説明が充実している。

第四章「商業化の不均等発展」では、商業革命が社会の構図や文化の形態に与えた諸変化が指摘されている。経済や都市の指導主体は土地所有者から商人へ移行し、北イタリアでは商人による政府の下での自由な経済政策、軍事的・外交的な拡大、信用取引の発展などが経済をさらに発展させ、周辺の経済的な後進地域にも刺激が与えられていった。

第五章「手工業と機械工業のあいだで」では、商業発展の刺激による工業の発展が指摘され、古代に比べての工人の地位や待遇の向上、同業組合の形成とその性格、またそれらの基礎の上に西欧各地で発達した毛織物工業やその他の諸工業が詳しく説明されている。

第六章「農業社会の対応」では、商業革

命と農業発展の相互影響が述べられている。ここでは、商業や貨幣経済の浸透が荘園の分解や農奴の身分的解放を招いたこと、また西欧各地で商取引用の作物の生産が普及したことが指摘されている。

本書は古代から中世盛期に至る西欧の経済史を簡明にまとめている点で他に類がない、

当時の経済用語や產物、諸制度を把握する上でも極めて有用である。また著者による経済的な面での意義の指摘は、しばしば読者をして、歴史上の諸事象が有する新たな意味に気づかせてくれる。西欧内部の地域的偏差の指摘や他の諸文明との比較も適宜行われ、西欧文明の持つ特質の把握が図られている。これらの特徴は、幅広い読者に対しても有用かつ興味深いものであり、

本書が経済史の教科書として欧米で愛読され続けている所以であろう。(阿部俊大)

エーリヒ・アウエルバッハ著／小竹澄栄訳  
『中世の言語と読者——ラテン語から民衆語へ——』  
八坂書房 二〇〇六・五刊  
A5 三九六頁 四八〇円

偉大なるロマンス語学者の遺著であり、初期中世に关心を持つ者にとって、クルティウスの大著と並ぶ必読の古典である。

原著は一九五八年にスイスのフランケ社から出版された。よく知られるように、アウエルバッハ（一八九二—一九五七）は、ユダヤ人ゆえにドイツでのポストを追われ、トルコのイスタンブール、そしてアメリカのプリンストン高等研究院、そしてイエール大学へと活躍の舞台を移した。

本書は、ほとんど全ての頁で原典との対話を繰り返すがゆえに、決して読みやすいとはいえない研究書である。「はじめに」と「序文」に続いて、第一章「謙抑体（sermo humiliis）」「補遺 受難の榮光（gloria passionis）」、第二章「初期中世のラテン語散文」、第三章「カミラ——ある

